

社会的記憶、ジョレスそして彼を支えた デュルケミアンたち¹⁾

夏 刈 康 男

はじめに

数年前に「ジョレス没後100年を前」に、とする副題でジョレスとデュルケム等の結び付きについて小論²⁾をまとめたことがある。その後2014年をむかえ、第一次大戦勃発の年から100年、そしてジョレスが暗殺されて100年を経た。ジョレス没後100年に当たる年にフランスでは、彼をどのように表わしたのか。直接見聞きしたり、入手した資料を手がかりにして「フランス便り」としてまとめてみた。なお、ジョレスの社会主義活動を支えた人たちの中にデュルケムをはじめ多くのデュルケミアンたちがいた。ここでは、ジョレスを知るために彼らとの関係にも触れる。まず、ジョレスが暗殺された7月31日の動向や彼に関するイベント等について、その様子について報告したい。

1. 100年前の暗殺現場で

ジョレスは、1914年7月31日午後9時40分、ジョレスが中心となって「正義、真実、誠実、自由」をスローガンに社会主義を広めるために1904年4月に発行されたユマニテ紙の新聞社を出て、道路を渡った三又路角にあるカフェ・レストラン・デュ・クロワッサンに入って食事を取っていた。そしてデザートの苺タルトを食べ終わったその時に、数日前からつけねらっていたアルザス・ロレーヌ青年同盟メンバーで学生ナショナリストR.ヴィラン29歳によってモンマルトル通りの歩道から、開け放たれたカフェの窓越しに2発の銃弾を頭部にあび、殺された。即死だった。戦争反対の大運動を展開中だった。その暗殺現場となったカフェに2014年7月31日午前9時過ぎにオランド・フランス大統領が献花のために訪れた。彼はまず、ジョレスが暗殺されたカフェの外側（つまり、そこは暗殺者、ヴィランが銃を構えたその足元）に、ジョレスを偲んで献花した。献花し

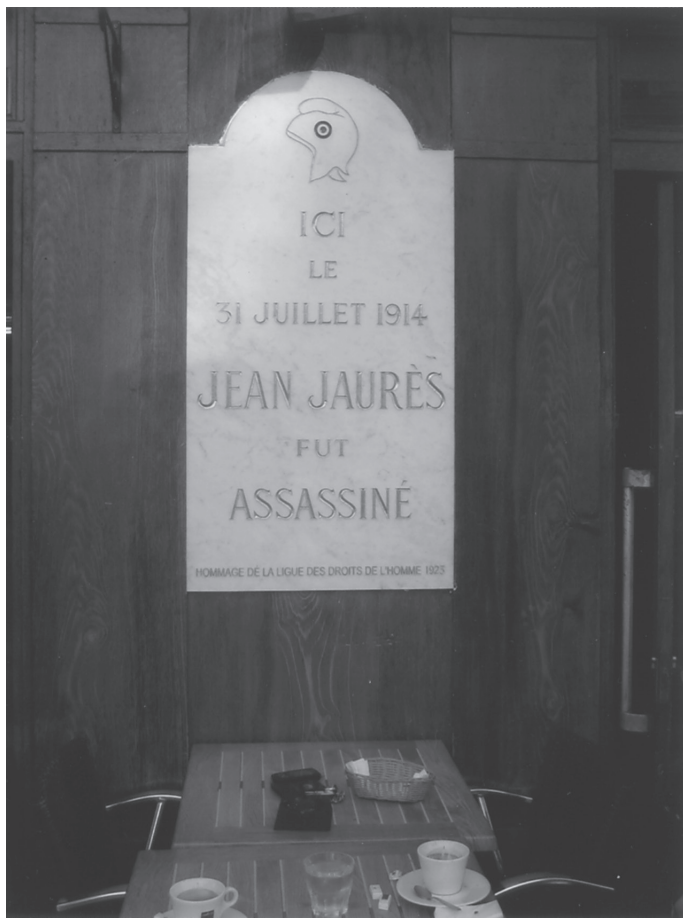
た後、大統領はカフェに入り、ジョレスが最後の食事をしたと同じテーブルにつき、エスプレッソをゆっくり飲み約40分ほどで、シトロエンに乗って帰った。そのカフェ前は事前に厳重な警備がひかれ、一般車は通行を禁止され、大統領に近づくことはできない状態におかれた。立ち入りが許されたカフェ前の歩道は、大統領の一举手一投足を見逃すまいとするテレビカメラ取材クルー、カメラマン、ジャーナリストでごった返した。その中に私のような一般人も入っているので大変なおお騒ぎだった。私は、大統領と帰り際に握手でもできたらと、カフェ出口の正面前に多くの報道関係ともみ合いながら待った。大統領は、9時40分頃、エスプレッソを飲み終えてゆっくりと笑顔で予想通り私のいる方向にまっすぐ歩いて出てきた。大統領と一言二言話せるかもしれないと思わせるような角度で彼は歩み、握手もできるかと思った瞬間、黒い車がスット間に割って入り、取材スタッフたちが大統領一言、の掛け声に二度、三度手を振って車に乗り込んで帰って行った。私との距離は車の中ほどまで縮まったが、淡い期待は実現しなかった。しかし、テレビや新聞などで見るオランドとは異なり、血色の良い、庶民的な大統領に極く近くでお目にかかれた。

暗殺現場への献花、そしてジョレスの最期のテーブルでのパフォーマンスは何を意味するのか。そのことは、オランドは「ジョレスの記憶を残そうとしている」、「遺産を引き継ぐ」と報じたル・モンドやフィガロの当日(31日)の新聞や夜のニュース番組での報道等々から次のような事が推察される。すなわち、単に100年前に暗殺された記念行事のための献花でも、同じ社会主義者としての献花でもない。大統領は、ジョレスの信念、すなわち正義に基づく行動、戦争に反対する徹底した平和主義、報道の自由、等々のために力を注いで死んだジョレスを敬い、社会主義に基づく政治指導者、ジャーナリスト、哲学者の遺産を今日の危機的状況に照らし合わせて、思い起こし、彼の信念と行為を、歴史の記憶として埋没させず、再生産し、現代に引き継いでゆこうという強いメッセージを発するためであった、と。

大統領が帰った後、同じ現場で午前11時からユマニテ紙が呼びかけたジョレスを追悼する市民集会が開かれた。こちらの集会には、大統領の取材の後そのまま残ったジャーナリストやテレビカメラ取材スタッフと社会主義支持者や労働組合関係者や一般の市民が約200~300人位集まってジョレスの死を悼むと同時に彼の偉業を称えた。その集会には、穏やかな

集合的エネルギーの高まりが感じられた。

まさに、7月31日のフランスにおけるジョレス追悼行事は、彼の死を静かに偲ぶというだけではなく、ジョレスが何をなしとげたのか、あるいは何をなそうとしていたのかを問うとともに、彼を歴史的記憶として現代につなげ生かしてゆこうとする集合的情熱を強く感じるものだった。



ここでジョレスは暗殺された

2. ジョレスに関するエキスポ

フランスでは、暗殺された一日だけに限ってジョレスに注目するだけではない。パリや彼の出身地で、長期間彼に関するさまざまなイベントを催した。パリでは、ジョレスがフランスの偉人の一人として祭られるパンテオンで、ジョレスと現代 (Jaurès contemporain) をテーマに6月26日から11月11日までエキスポを開催した。そこでは、ジョレスの誕生から生存中の家庭生活、政治家としての活動、そして多くの業績、さらにジョレスを描いたコミックを含む芸術作品群、研究書等々、ジョレスの全体像が世界からパンテオンを訪れる人々に理解できるよう展示されていた。

ジョレスの生まれ故郷に近い大都市トゥールーズでは、市の中心部キャピトル広場と市役所をはさんだ隣地にある主塔前広場近くの地下鉄駅入口の広場で、トゥールーズ100年の動き (Toulouse mobilisée 1914-2014) と題したパネル展示会が催されていた。その展示の1つのコーナー (全部で四面) がジョレスに関する写真を中心とした展示である。四面のうち一面は、1914年7月31日のジョレス暗殺死を知らせるトゥールーズ発行の8月1日付のミディ社会主義 (midi socialiste) 紙の大写真の展示である。一見、ユマニスト紙を思わせる新聞であるが、この地域に社会主義紙が独自に存在していたことがこの展示からわかる。他の一面は、1908年10月17日の社会党大会の写真で、壇上にジョレスがいる。うしろ二面は、戦争の犠牲者と題してジョレスの大写真が展示され、もう一つは、ジョレスの主張として彼が反帝国主義者であり、反軍国主義、平和主義、反植民地主義者として共和国のために力を注いだことが展示されたものである。ジョレスにかかわるパネル以外では、第一次大戦から100年を意識して、第一次大戦当時の軍隊やアフリカからの移民労働者を利用した鉄道敷設の写真等々が展示されていた。それらの写真からは、当時ジョレスが社会問題、社会正義の問題として取り組んだ移民労働の実状を知る手がかりを得られるようになっていた。ただ残念ながらトゥールーズのパネル展示は、広場とはいえ路上での催しのため多くの市民が関心を持って足を止め見入るような光景は見られなかった。なお、トゥールーズはジョレスの生誕地カストルから電車で約80分ではほぼ地元といえる。そのトゥールーズでジョレス像が二ヵ所にあることが確認できた。一ヵ所は、パネル展示場に近い主塔広場 (こちらの像の前には数日前の7月31日の日に彼を偲んで献花際を

催した際の花束が残されていた)、ともう一カ所は、市役所に入っすぐの大階段入口にあった。ジョレスは若い時代トゥールーズ大学で哲学を教授したこともあり、縁も深いためか市役所のジョレスは堂々とした大きな像である。

ジョレスのタルン県(出身県)では、大々的にエキスポや講演会等々、さまざまなイベントを県内各地で2014年3月～10月にわたって開催した。それらの催しを県が発行したアジェンダ(Agenda des manifestations dans Le Tarn)に従って概略紹介すると以下の通りである。

まず、県知事T.カルセナック及び文化・コミュニケーション大臣のA.フィリペッティとも2014年をジョレス年として彼を追悼し、彼についての催しをすることについての挨拶文で「ジョレスの精神を生かそう」、「ジョレスの考えと誓いを今に継承する」とジョレスを単に記憶に止めるだけではなく、彼の思想や精神を現代に生かすことの重要性を説いている。まさに、両者ともジョレスの遺産継承者は、県民であることをそこで説いている。

さて、催しは、県内各地でエキスポ(17回)、講演会(16回)、映画等上演会(14回)、その他ジョレス関連の歴史地区への遠足等々合わせると合計69を数える。もっとも開催の多いエキスポは、いずれもジョレスと縁の深いアルビ(エコール・ノルマル卒業後、最初に哲学教授として赴任したのがアルビ・リセだった)が最多で3月、4月、9月、10月と各々テーマを代えて開催された。アルビで開催されたエキスポでもっとも大きなのは、タルン県立古文所館主催のエキスポで6月20日～10月3日まで開催された。このエキスポの特徴は、ジョレスの生まれ故郷のタルンを強調して「南仏人ジョレスの遺産」という観点にこだわったところにある。その他、ジョレスが初めて炭鉱労働者を導いてストライキ運動で指導者となったカルモーや、それに生まれ故郷のカストルでも市役所内で6月30日～8月30日まで展示会が開催された。

次に多い講演会は、3月から10月にわたってタルン県内各地で開かれた。アルビだけでもジョレスと平和、ジョレスの思想等々のテーマで開催された。ジョレスの活躍したドキュメントを含めた映画等の上演会は、3月から10月にかけて、アルビやカルモーなど11カ所で開催された。こうしたイベントとは別に興味深い催しがなされた。それはジョレスにまつわる歴史的地域をめぐるタルン県内の遠足(小旅行)である。例えば、6月

3日～20日までカストル、アルビ、カルモー等、ジョレスの活躍し、輝かしい成果をあげた地域をめぐり、フランスのために、あるいは労働者のために命をかけて活動したジョレスをより深く知ろうとする小旅行のイベントである。

こうした地元のさまざまな催しから透けて見えてくるのは何か。それは、ジョレスが今もってこの地方の人々にとっていかに大きな存在であるかということと、かつ彼を過去の偉人として位置づけず、今の時代に彼の思想や行為を理解し、生かそうとする熱い思いである。そこには、ジョレスは地元の人々にとっての集会的記憶に止まらず、彼の考えたこと、なしたこと、残したことを歴史的記憶として現代に再生産しなければならないとする力強いエネルギーが感じられる。

3. ジョレスの活動及び思想

以上のようにジョレス没後100年を期にフランスでは2014年をジョレス年と呼んで彼について多方面で関心が持たれたり、彼から何かを学ぼうとする、まさに歴史的集会的記憶を再生産しようとする運動が認められた。そこで、次にそれらの運動は、何から由来するものなのかを知るために彼の活動あるいは思想について簡単にみておこう。

ジョレスは、1878年エコール・ノルマル・シュペリユール（以後エコール・ノルマルと略記）に入学するが、入学早々からのちに社会学者となるデュルケム等とともに社会主義に関心を持ち、このテーマを学生時代の研究テーマの一つとした。しかし、その頃はまだ社会主義者とはなっていない。彼は、エコール・ノルマルを卒業すると哲学教授資格を得て、まずは出身県タルン県のアルビ・リセで哲学教授の職に就き、83年には、トゥールーズ大学文学部の哲学の講師へと転じ、順調に大学教授職のキャリアを高めてゆくかに見えた。しかし、85年26歳で一転して政治家に転じる。彼は85年にタルン県から下院議員の選挙に立候補して当選し、もっとも若い下院議員となる。この時もまだ社会主義者となっていない。中道左派のジュール・フェリー陣営に与した。若くして議員となり、順風満帆の議員生活かと思われたが、89年の選挙で落選し、彼は進むべき方向性に苦慮する。彼が選んだ方向は、90年にトゥールーズ市議会議員兼助役の職に就きつつ、同じ年学者への道を目指して博士論文の研究を始めるという二足の草鞋生活である。博士論文執筆の準備のため彼は、約3年間出身校のパ

リのエコール・ノルマルの図書館で哲学の研究を始める。この研究生活の過程で彼は、その後の人生に大きな意味をもたらす社会主義者となる契機を得る。それは、エコール・ノルマルで同校の出身者で社会主義者でもある図書館司書ルシアン・エルとの出会いである。ジョレスは、エルの助言を得て社会主義の研究、さらには、マルクスの『資本論』の研究を本格的に行った。その結果、博士論文の副論文となる「ドイツ社会主義の諸起源」を完成させ、92年3月には主論文「感覚世界の現実」を完成させて博士の学位を獲得した。

ジョレスは、パリでの研究生活の中で社会主義者としての確固たる信念を得たことになるが、得られた彼の社会主義観とは、どのようなものなのか。田原音和によれば、「社会主義の倫理性を科学的に裏づけることを主眼とし、議会制を擁護しつつ、その枠内で民主主義革命を実現しようとする政治的実践（改良主義）を志向し、かつ社会主義理論と運動を狭いナショナリズムから解放し、ドイツ、イギリス、ロシアなどとの連携を通して諸運動を展開することを重視する」（田原音和，1983：77-78）というものである。

博士論文を完成させた社会主義者ジョレスは、92年（12月）、彼の労働運動の出発点となる、生まれ故郷に近いカルモー炭鉱の労働争議に加わり、指導的役割を發揮する。そして、93年今度は、独立派社会主義者として下院議員選に出馬し、当選をはたす。その後98年の選挙で再び落選（なお、1902年に復活して、その後は落選することはなかった）するが、その年は、その後のジョレスの評価を決定づける活動に入っている。その1つは、ジャーナリストとしての活動である。社会主義系日刊紙であるラ・プチット・レピュブリック（la petite république）の共同編集長となり、社会主義政党の統一のために健筆を振るい始めたのがこの年である。当時分裂していた社会党諸派が彼の期待し、望んだ通り統一社会党（Parti Socialiste Unité）として統一され、第二インターナショナルフランス支部としてフランス社会党が創設されるのは、1905年で、約8年かけてジョレスの努力は結実されることになる。

もう1つは、当時国分を二分して争われていたドレフュス事件に加わったのが98年である。社会主義者は、この事件で、必ずしも統一してどちらかに加担することはなく、擁護派とそうでない派に分裂していた。ジョレスは事件発生当初は、あまりこの問題にかかわろうとしなかった。よう

やく98年になって94年以來のドレフュス事件について予審記録等を調べ、裁判の違法性を明らかにしてドレフュス大尉の無実を論証する論文を発表し、ドレフュス擁護派に与し、「この問題への社会主義の介入の正当化」(Dupont, 2010: 175)を宣言し、人権擁護のため、正義のため積極的に活動した。そこにおける彼の批判の矛先は、増大するユダヤ人スパイへの憎悪の大運動とナショナリストに対してであった。これによって彼は、のちの人権擁護派、移民問題や民族問題と闘う正義の人として評価を高めた。

1904年、自らの主張を広く伝えるために自らが発行人かつ責任者となって政党機関紙とは異なる社会主義新聞(journal socialiste)「ユマニテ」を発行する。その第一号(4月18日)紙上で彼は、「ユマニテ紙によって人間性(ユマニテ)を実現する」と宣言する。組織の中心は、ジョレス自らが政治局長につき、全紙面に采配を振るった。社説と外国政治部門には、ジョレスの社会主義者への道に影響を与えたエルガ、協同組合運動欄にはモースが就いた。モースは、ジョレスと同じ理念の下、編集の仕事も行った。モース以外にもデュルケミアンの中には、レヴィ・ブリュールが友人としてあるいは経理を担当する役員として「ユマニテ」に協力した。このように「ユマニテ」は、ジョレスの社会主義に共鳴、支持したデュルケミアン社会学者たちに支えられる部分もあった。

「ユマニテ」発行から10年後、彼は突然この世を去る。彼は、1914年7月31日二発の銃弾によって55年の生涯を閉じた。対独復讐とナショナリズムの高揚する時代の中でジョレスは「ユマニテ」で「冷静さの必要」を説き、軍事衝突を回避するためにサンディカリストや社会主義者等々の左翼勢力の結集を説き、フランス総動員体制に反対した。しかし、彼のそうした主張も行動も暗殺によって封じられることになった。ジョレス暗殺を知らせる8月1日の「ユマニテ」は次のように報じた。「忌まわしい大殺りくが今この時間にも準備されている。軍国主義者とナショナリストたちは、殺人モンスターとなろうとしている」。そうした時に「社会主義者、フランス共和主義者の誇り、ジョレスは平和のための犠牲者」となった、と。

ジョレスの思想については、改良主義と革命、集産主義と個人主義、形而上学的観念主義と史的唯物論、インターナショナルと祖国とを総合した思想(Branciard, 1967: 191)、サン-シモン、フーリエ、プルードン等のフランス伝統の社会主義とマルクス主義とを結合しようとした社会主義(田

原音和, 1983: 77-78)、社会主義と共和主義との結合を旨とした社会主義的共和主義 (Fournier, 2007: 267)、マルクス主義、集産主義、平和主義、史的唯物論の賛同者 (Dupont, 2010: 10)、個々人間、階級間、国家間の融和に努め、社会的勇気を持った社会主義者 (2014年7月31日ユマニテ紙)、常に左翼統一を求めたゴットファーザー (2014年7月31日ル・モンド紙)、ドレフュス擁護、死刑廃止、報道の自由、正義を求めた社会主義者 (Ductert, 2014: 34) 等々さまざまな評価や位置づけがなされているが、そうした幅広い評価の中にこそジョレスが1世紀を超えてなお、多難な現代に通じる社会主義者として求められる理由があるように思われる。

4. ジョレスを支えたデュルケミアンたち

ジョレスと同じ時代を生きた社会学者の中に彼の社会主義活動、運動を支えたデュルケミアンたちがいた。ここでは多くのメンバーのうちジョレスとかかわって共鳴、あるいは支持した人物のうちデュルケム、レヴィ・ブリュール、モースについて簡単に見ておきたい。

まず、デュルケムである。ジョレスとデュルケムは、友情、社会主義観、活動という面で共鳴しあった仲である。2人はエコール・ノルマル受験を目指して、寄宿したジョフレベンションの時代から友情を結び、入学後は、3年間エコール・ノルマルの寮で共に生活し、友情を高めたばかりでなく、研究テーマを共に社会主義とし、議論し合った。デュルケムはのちに社会学の研究対象として社会主義を選び、ボルドー大学での社会科学講座のテーマとするなど社会学の研究テーマとしてその後も関心を持ち続けた。彼は、社会主義に社会の組織化、統合化あるいは経済生活の社会化、道徳化を希求するが、それらの観念は、ジョレスの考える社会主義の倫理性と軌を一にする。活動という面から2人の関連をみると、何と云ってもドレフュス事件での共闘がある。ジョレスは、当初この事件に関心が薄かった。彼には、エルやレヴィ・ブリュールとともにデュルケムもドレフュス擁護派に加わるよう説得した。特に、デュルケムは正義の追求のためにドレフュス派に与するように説得した。先に、ジョレスは98年に予審記録等の研究によってドレフュス擁護派に与するようになったと記したが、そうした研究だけでなくデュルケム等の周囲の友人たちの熱い説得もあって、ドレフュス擁護派に加わったのである。いずれにしてもフランスの国論を二分した事件の中でデュルケムとジョレスは人権と正義のために



コント生誕の地、モンペリエのジョレス像

共に運動し、闘った。

ジョレスとデュルケムは、受験勉強で苦勞した時代からの友情と社会問題解決のために有した社会主義への関心等々、若い頃から同じ時代を生きた特別な存在と言える。ただしかし、デュルケムは生涯を社会学者として貫こうとして、これを実践したため、政治活動とは一線を画した。そのた

め、ジョレスの共鳴者であっても、彼はジョレスの政治活動や政党には与しなかった。

レヴィ・ブリュールは、習俗の実証的科学の構築を成し遂げただけでなく、デュルケミアン社会学への参加表明の著書であり、フランス社会学派を事実上明確に誕生させた画期的な著書 (Jonas, 1991 : 276) (Mucchielli, 1998 : 247) である『道徳社会学』(勝谷在登訳, 1939) (La morale et la science des moeurs, 1903) や、あるいは、未開社会における集合表象や原始人の精神性を解明した『未開社会の思惟』(山田吉彦訳, 1935) (Les fonctions mentales dans les société inférieures, 1910) で名高い。彼は、デュルケムより1つ年上で、ジョレスより2つ年上である。デュルケムとの関係ではデュルケムの存命中のみならず、デュルケム死後もモースと協力してデュルケム学派発展に貢献した。そうしたデュルケムとの関係の深いレヴィ・ブリュールとジョレスとの関係はどうだったのか。レヴィ・ブリュールもデュルケム同様、ジョレスと密接な関係をもっていた。レヴィ・ブリュールは、元来ジョレスと同様に正義の情熱にあふれ、プロレタリアへの奉仕の精神や犠牲の精神を有し、多くの人たちから信頼される好人物であった。そして、彼は社会主義者としてジョレスを支持した。レヴィ・ブリュールはジョレスを人間的にも思想的にも十分理解しジョレスの政治活動に与した。ジョレスもレヴィ・ブリュールに心を許す親友と認めていた (Fournier, 1994 : 261-262)。レヴィ・ブリュール、ジョレス、デュルケムの3人は共に深い友情で結ばれていただけでなく、ドレフュス事件でのドレフュス擁護派としての共闘、ジョレス社会主義への共鳴と思想的にも理解し合える知的親友関係にあったと言える。しかし、レヴィ・ブリュールとジョレスとの関係でデュルケムには認められない接点が1つある。それは、ジョレスが1904年に発行した「ユマニテ」とのかかわりである。レヴィ・ブリュールは「ユマニテ」紙発行に際し、株主として10万フラン出資している。この額は、ユダヤ系フランス人実業家レオン・ピカールとともにもっとも多額の出資額である (田原音和, 1983 : 132)。そして、単に出資しただけでなく彼は、同紙の会計担当役員となって「ユマニテ」紙にかかわって、ジョレスの新聞発行を支えた。この点では、レヴィ・ブリュールはジョレスの活動に一歩踏み込んで、より実践的に支援活動をしていたことになる。

さいごに、著書『贈与論』及びフランスにおける民族学研究のパイオニ

アで知られるモースとジョレスとの関係について見ておこう。モースにとってジョレスは、デュルケムとS.レヴィとともに、彼の生涯における「3人の偉大なる師」(Fournier, 2007: 155)の1人である。デュルケムは、周知の通りモースの身内(叔父-甥の関係)であり、モースは若い時から学問的刺激を受け、大学進学もエコール・ノルマルではなく、敬愛するデュルケムの下で学ぶためにボルドー大学に進んだほどである。彼は、研究者になったのち常にデュルケムの継承者を自任していた(レヴィ・ストロース, 1968: 23)。実際、彼はデュルケムによって創刊された「社会学年報」の主力メンバーとなり、デュルケミアンとしてデュルケムを支え、デュルケム死後も「社会学年報」の復刊に力を注いだ。デュルケムもモースには、親愛の情を持って目を配った。例えば、モースが社会主義者となり政治活動に入れ込む姿を見て、モースに自身と同じように「研究に専念してほしいと心配」していた(Fournier, 2007: 268-269)。

レヴィは、フランスにおける東洋学研究の第一人者で、高等研究院では、インド宗教とサンスクリット語の教授であった。モースは96年に博士論文研究のために当研究院に入学し、彼の下で研鑽した。

さて、上記2人は、基本的には、研究の上でのモースの恩師と位置づけられるが、ジョレスとはどのようにかわり、偉大な師と思うようになったのか。まず、2人の出会いから見ておこう。2人の出会いは、共に社会主義者になってから早い段階に訪れる。ジョレスが社会主義者になった時期については、すでに見た通り1890年(ジョレス31歳)エコール・ノルマルでのエルとの出会いが契機となって、92年頃と考えられている。モースは1890年ボルドー大学に入学し(モース18歳)、すぐにデュルケムの講義に集まる学生たちによって社会主義研究サークルが組織され、モースもそのサークルに熱心に参加し、社会主義への関心を高める。なお、このサークルはエルがパリで組織した学生社会主義研究サークルがボルドーに波及して作られたものである。そして、モースはそのサークルで『資本論』を読むなどマルクス研究ののち92~93年頃に社会主義者となり、フランス労働党(parti ouvrier français)に加入し、政治運動に加わる(Marcel, 2001: 21)。こうしてみるとモースとジョレスは、ほとんど時を同じくして社会主義者となっていることがわかる。

その二人が互いに社会主義者として出合うのは、93年である。92年に哲学博士となり、かつ社会主義者となってジョレスは、研究者の道に進む

かと思われたが、政治家の方向を選ぶことになる。それは、1892年彼の出身地のカルモー炭鉱の労働争議に労働者の指導的立場で加わり、社会主義運動を実体験したことと無縁ではない。その時の労働運動を経て彼は、93年に独立社会主義派として下院議員に返り咲く。まさに、若き34歳の社会主義指導者として俄然日光を浴びる存在となった。一方は新進気鋭の社会主義政治家、他方は社会主義運動への関心を高める若き学士との出合いのきっかけは、ボルドーの学生社会主義研究サークルとフランス労働党とが主催したボルドーでの講演会である。講演会には、ジョレスやゲードが招待され出席した。モースは、この講演会の中心メンバーとして開催に力を注いだ。講演会では、ジョレス派とゲード派との激しい討論が交わされたが、その討論で両者から引き合いに出され、称賛された社会主義観念は、分裂した社会主義諸派全てを包括する社会主義の統合とさまざまな経済活動、企業活動の組織化を社会主義に求める社会主義観を社会学者の論点から説いた93年のデュルケムの論文「社会主義の定義についてのノート」であった (Fournier, 2007: 157-158, 268-269)。モースにとっては、社会学者デュルケムへの彼らの評価は、この上ない喜びであったと思われるが、彼の関心を高めたのは、社会主義思想に基づいて実践するデュルケムの親友ジョレスの社会主義に対してであった。

このようにしてモースは、自身が将来偉大な師と呼ぶことになるジョレスと出合い、デュルケムの心配をよそに社会主義者として政治活動にますます力を注ぐことになる。ジョレスとの出合いから2年後(95年)モースは、パリに出て哲学教授資格試験に合格し、先に述べたように96年に博士論文研究のためにパリの高等研究院に入り研究にも打ち込む。そして98年には、デュルケムとジョレスが連携して活動したドレフェス擁護派に加わり、同時にエル等がジョレスを支援する目的で立ち上げた統一社会主義集団 (groupe de l'unité socialiste) に加わった。この集団には、モースの他、のちにデュルケミアンとして「社会学年報」の中心メンバーとなるシミアン、アルボックス、グラネ、エルツ等々も加わった。彼らは、99年には、同じくエル等によって社会主義の役割を無関心な学生に教え、啓蒙しようとして開設された「社会主義学校」(l'école socialiste) にも加わった。彼らはそこにおいて社会学をもって社会主義を基礎づけた (Mucchielli, 1998: 234)。この頃の世界社会主義活動についてモースは、次のように述べている。われわれの党は、「労働者階級の党、社会改良と革命の党」であり、

「日に日に新たな活動家を組織し、常に確実な一步をもってその政治的経済的目標にむかって前進を続けている。……社会主義は、かつてなく生氣をおびている。われわれの全組織の活動は、まるで熱を発しているかのようである」と(モース, 1974:256-257)。これらの文章からは、モースがいかに社会主義活動に熱心に与し、かつ、彼らの組織が活発に運動していたかが読みとれる。なお、そうした活動の中でもモースは研究をおろそかにしなかった。彼は1901年には研究が認められ、高等研究院の「未開諸民族の宗教史」講座の専任講師になり、07年には副学長、14年には(ジョレス暗殺の年)には学長になっている。

モースは、充実する研生活と社会主義活動の中で、1904年のジョレスの「ユマニテ」紙創刊で、さらにジャーナリスト、モースを誕生させた。「ユマニテ」は、先にあげたジョレスの社会主義を支持する若きデュルケミアンや彼らの指導的立場のエル等が支えるが、その中でもモースは、彼らの中で抜きん出ていた。それは、彼が、ジョレスやエルと同額の1万フランを出資し、財政面で支えたことと、ユマニテ紙の全体会議にも編集会議にも常に顔を出し、かつ記者として、ジョレスに対して誠実さをもって支えたことなどから言える。当時、モースは、協同組合活動に特に関心を持っていた。彼は、協同組合員が社会主義者になるのではなく、社会主義者が協同組合員になる必要があると考えていた(Fournier, 2007:431)。そうした関心から「ユマニテ」紙で協同組合欄を作り、担当記者となった。彼は「ユマニテ」紙に協同組合運動について多くの記事を書いた。彼は、記者として常に労働運動の現場に出かけ、記事の中で協同組合組織の重要性を説き、労働者救済を説いた。彼の記事は、情報提供者であるとともに事実をより深く分析し、解説するなど教育的であった。モースは、社会主義者としても、ジャーナリストとしても心酔するジョレスから信頼された。しかし、モースがそうした方向に肩入れをすればするほど、研究に専念することを望んだデュルケムからは、度をこした大志と、大いに当惑され、失望された(Fournier, 1994:261-262, 2007:579-580)。

1914年7月31日、モースはバカンス先のシャモニーでジョレス暗殺を電報で知る。彼にとって特別な友人であり、英雄の突然の死である。彼は、自分が彼と居合わせなかったことを悔やんだ(Fournier,1994:371)。

デュルケム、レヴィ・ブリュール、モース各々について、ジョレスとどのようにかかわったかを簡単にみたが、彼らは、各々かかわり方は異なる

にしても、公私にわたり共に深く結びつき、ジョレスの社会主義に共鳴する点で一致する。加えて、彼らの交わりは、ジョレスを支えるデュルケミアンの社会主義知識人グループとして単一ではなく、集合的でもある。それらは、19世紀末から20世紀初頭に新たな科学を構築しようと結集した社会学者集団メンバー（デュルケミアン）とジョレスを中心とするフランス社会主義勢力との共生体と言える性格を読みとることもできる。

おわりに

2014年をフランスでは特別にジョレス年と位置づけて彼の思想、活動、業績等々について、かなり詳細に紹介し、理解を計ろうとした。これまで40年間、フランスのあちこちを旅してきてどの町に行ってもジャン・ジョレス通りがある印象を漠然と持っていた。町の通り名の付置は、フランスでは市民にとって敬愛を公的に表象する特別の意味がある。ジョレス年に当たり、ジョレス特集号を発行したL'histoire誌は、ジョレスの名前を冠した通りの数がフランス全国に2,354ヵ所もあることを報じている（2014, NO.397:63）。さらに、2007年のフランス大統領選のキャンペーンでジョレスがサルコジから88回、ロワイヤルから34回も引き合いに出されたこと（同上書:64）、1960年以降の歴代大統領のうち、ド・ゴール（ジョレスの高潔さ、気高さを称える）、ミッテラン（輝かしい国民的社會主義者ジョレス）、サルコジ（左翼はジョレスの共和政を放棄したと非難）、オランダ（私はジョレスの理想と現実、急進主義と責務の調和を尊敬し、彼のジントーゼを後ろ楯にする）の各大統領は、ジョレスに敬意を表するために選挙の勝利後、ジョレスの地元であるカルモーやトゥールーズを訪れてジョレスを称えていることなどを紹介している。

そうしたことのの一つ一つが、ジョレスが今日も国民にとっていかに慕われ、偉大な存在であり続けていることかを示唆している。ジョレスは、これからもフランスにとって集合的歴史的に記憶され、社会的政治的に再生産されることを2014年のジョレス年のさまざまな催し、運動は、力強く示している。

注

- 1) このタイトルは、デュルケミアンでもあり、ジョレスの社会主義及びユマニテにも深くかかわった、M.アルバックスの集合的記憶論（Halbwachs, M, *La*

mémoire collective, P.U.F. 1968 (1950)) において示された内的記憶、パーソナルな記憶、自伝的記憶に対する外部的記憶、社会的記憶、歴史的記憶の概念から借用した。その理由は、フランスでは2014年をジョレス年と位置づけ、ジョレスの暗殺事件を100年前の事件と個人的なものとして単に回顧するのではなく、社会的記憶、集合的記憶として捉え、ジョレスを現代と強く結びつけて彼の死を生かそう（記憶の再生産）とさまざまな催しがなされているということからこの表題とした。

2) 夏刈康男、「ジョレスとデュルケム、モースの結び付き」日仏社会学会年報、第21号2012。本稿は、この小論をベースにしている。なお、ジョレスの略歴や活動、生活史に関しては次の資料を新たに加えている。

Ville de Castres, Centre national et musée Jean Jaurès, “La vie de Jean Jaurès”.
Assassinat de Jean Jaurès - Wikipedia http://fr.wikipedia.org/wiki/Assassinat_de_Jean_Jaurès
<http://www.assemblee-nationale.fr/histoire/jaures>

参考文献

- Jonas, E., 1991, *Histoire de la sociologie*, Larousse.
- 田原音和, 1983, 『歴史のなかの社会学』木鐸社.
- Ductert, V., 2014, NO.397, “La justice avant tout” *l’Histoire*.
- Dupont, C., 2010, *Jaurès*, Les belles lettres.
- 夏刈康男, 2005, 「忘れられたフランス社会学研究の日本人パイオニアたち」『日仏社会論への挑戦』所収, 恒星社厚生閣.
- Branciard, M., 1967, *Société française & luttes de classes*, chronique sociale de France.
- Fournier, M., 1994, *Marcel Mauss*, Fayard.
- Fournier, M., 2007, *Emile Durkheim*, Fayard.
- Marcus, P., 2009, *Jaurès*, La documentation.
- Marcel, J - C., 2001, *Le Durkheimisme dans l’entre deux guerres*, P.U.F.
- Mucchielli, L., 1998, *La découverte de social*, Éditions la découverte.
- モース著, 宮島喬訳1974 (1900), 「高等法院判決と社会主義者の宣伝活動」『マルセル・モースの世界』所収, みすず書房.
- レヴィ・ストロース著, 加藤正泰訳, 1968, 『フランス社会学』誠信書房.